

岑參の詩について

——同一表現の多用——

盛唐の詩人岑參は、高適と並んで邊塞詩人と稱されている。宋の許顛の「彦周詩話」にも、

岑參詩、亦自成一家。蓋嘗從封常清軍、其記西域異事甚多。如優鉢羅花歌、熱海行、古人傳記所不載者也。

という記載がある。だが、岑參の詩は邊塞詩ばかりではない。たしかに他の詩人の作品と比較してみると、岑參の邊塞詩は特異である。その地理的な廣がり、詠じられた素材、詠風など、他の詩人の邊塞詩とは全く異なっている。そのため岑參は邊塞詩人と評價されるのであろうが、それだけが彼の詩であるかといえれば、決してそうではない。

岑參の詩を、李白、杜甫、王維、高適など同時代の他の詩人達の作品と比較してみると、岑參独自の特徵と思われるものがいくつある。

まず第一は、對象の捉え方が特異であるということである。

分明峯頭樹 倒挿秋江底(嶺南東歸臨江廳 嶺南一覽卷四)

樹が秋の澄んだ江の底にさかさまにつきささっているという、この「挿」の用法は珍しい。事實は、單に樹が江に映っているだけのことにはすぎない。そしてそのことを、讀者自身十分に承知しながら、しか

も岑參が描き出した情景を、素直に鮮かに思い浮かべてしまふ。李白にも、

舟浮瀟湘水 山倒洞庭波(會人編)

という例があり、湖面に映る山の影を「倒」と捉えてはいる。だがこの例では、岑參の句ほどには具體的に、樹が江の底につきささった格好で映っている、そのくつきりとした影が目の前に浮かんでこない。また、

馬汗踏成泥 朝馳幾萬蹄(宿鐵關西館)

という例がある。馬の汗が踏まれて泥になる。汗を踏んで泥にするのは馬の蹄に違いない。果てしなく廣い砂漠に、無數の、その蹄の跡が續いている。それを岑參はこのように表現したのであった。他の詩人の作品に、蹄の跡に目を向けた例は無い。まして馬の汗が蹄に踏まれて泥になると捉えた例など皆無である。そうしてみると、岑參のこの表現は極めて珍しいといえよう。しかもこの珍しい表現が描き出す情景を、讀者は容易に思い浮かべることができる。岑參はこのように具體的にわかりやすく、しかも特異な、對象の捉え方をしているのである。

また、次のような例もある。

新 免 惠 子

甌香茶色嫩 窓冷竹聲乾(華歆會嚴京 兆後廳竹齋)
開瓶酒色嫩 踏地葉聲乾(魏州西亭集 魏公安集)

茶や酒の味や香りでなく、色に注目した例は他の詩人にはほとんど無い。また、音が「乾いている」という捉え方は皆無である。これなど現代風の表現であるとは言えまいか。このような特異な感覚で捉えた表現が岑参にはあるのである。

さらに、

映硯時見鳥 卷簾晴對山(歐陽修判官使 院即事見呈)

硯の面に、飛ぶ鳥の姿を認めている。目で直接的に対象を捉えるのではなく、いったん硯の面に映してから捉えている。思いがけない目のつけ所で、ある意味では屈折した捉え方であると言えなくもない。視線を下に向け、対象を何かに映してから捉える、つまり何かの枠の中で対象を捉えている、こうした例が他にも数例あり、ここからも岑参の対象の捉え方の特異さが窺えよう。

そして忘れてならぬのが擬人的な捉え方である。

昨夜山北時 星星聞此鐘(秋夜宿臨邛寺南 涼夜星鐘遊人)

星たちがこの鐘の響きを聞くと言い、
草羨青袍色 花隨黃綬新(發武卿郎中 軍赴碭石題)

榮轉して行く人の青い袍の色を草が羨み、黄綬の眞新しさに花がつき随うと言う。こうした擬人的な表現は、岑参の作品中、枚擧に暇がない。これらについてはまた別の機会に整理してみたいと思う。

以上いくつか見てきたような捉え方が岑参にはあるが、以上のような岑参の捉え方は他の詩人の作品には見あたらないうである。

第二の特徴としては、使用している語が他の詩人の作品には用例の無いものであったり、あるいは岑参以後に初めて用例の見える語であ

ったりすること、また岑参独自の用法も多いことがあげられる。たとえば、

楚雲引歸帆 淮水浮客程(發許子緝第歸江寧 拜親因寄王大昌齡)

「客程」は旅の行程のこと、ここでは具體的に、舟の去ったあとに残る一筋の浪の跡を思い浮かべていいであろう。

北庭苦寒地 體内今何如(寄韓樽)

文字通り、體の内、五臓の形まで浮かんできそうである。「おかげんはいかがですか。」などと尋ねるより、具體的な體と、その體内の様子想像させ、相手との親密さを感じさせる。詩の中で、このような語が、このように用いられた例は、他の詩人には見られない。

次のような例もある。

杉風吹袈裟 石壁冷孤燈(寄青城龍 梁炎道人)

「杉風」については、白居易に、

竹露冷煩襟 杉風清病容(題楊頌 士西亭)

の例がある。また、

愁客葉舟裏 夕陽花水時(還東山 洛上作)

「葉舟」については、蘇軾に、

心隨葉舟去 夢遶千山碧(自徑山回、得呂察推詩 用其韻題之、宿湖上)

とある。だが岑参以前には寡聞にしてその例を聞かない。前代に用例のある安定した語を使用しようとする杜甫と、對照的な態度といえよう。

第三に、岑参の詩は、一見、その詩を作った主旨とはあまり關係の密接でない事柄に言葉を多く費す傾向があり、またその詩を構成する句と句の間に飛躍があつて、一篇全體が主題の下に一貫して流れていないように思われる。たとえば「瀆水東店、送唐子歸嵩陽」詩を見て

みると、

野店臨官路 重城壓御堤

山開瀨水北 雨過杜陵西

歸夢秋能作 鄉書醉懶題

橋廻忽不見 征馬尙聞嘶

初めの四句で場面の説明をしているが、送別らしい言葉はない。嵩陽は岑參自身の故郷でもあり、頸聯は自分の思いを述べているわけである。勿論、送別詩であるを意識して讀めば、故郷へ手紙をことづけたいと送別をにおわせているように受け取れなくもない。だがここまでの六句を讀んだ段階では、送別詩らしさは感じられない。尾聯に至ってはじめて送別であるとわかる。だがこの二句と、それ以前の句とのつながりは薄く、本来の送別という主旨の下に一貫して流れていない。ただし本人の氣持ちの内面は一貫しているに違いないことは無論である。

また「送楚丘麴少府赴官」の詩は、

青袍美少年 黃綬一神仙

微子城東面 梁王苑北邊

桃花色似馬 榆筴小於錢

單父聞相近 家書早爲傳

まず相手のことから述べ始め、次に相手が赴く先の名所を並べ、そうしてたぶん道中のことを思いやっているのであらう句があつて、最後に語りかけの句で終わる。だが、それぞれの聯が断片的であつて、讀む者は、それぞれの句が描き出す断片的な影像を自分でつないでいかなければならない。同様のことがつぎの「胡歌」詩についても言える。

黑姓賢王貂鼠裘 葡萄官錦醉纏頭
關西老将能苦戰 七十行兵仍未休

起句の「賢王」を「全唐詩」では「蕃王」に作っているが、それはざておき、前半の二句と後半の二句とが全く對照的な場面を描いていながら、前後をつなぐのは讀者の推理に任せられている。

岑參はこのように、その詩を作った主旨とはあまり關係の無いことを多く述べる傾向があり、句と句の間に飛躍があつて、バラバラの印象を與える場合があるほどに、一篇全體の流れが一貫していない。

以上述べてきた特徴は、岑參の詩を追求する上に重要であるが、それ以上に岑參の詩の特徴を表わすものとして、第四に、類似した表現、同一表現の多用ということがある。がんらい一つの詩の中で同じような句を繰り返して用いるということは、他の詩人にもしばしば例のあることである。岑參にも、

昨日一花開 今日一花開

今日花正好 昨日花已老（蜀葵花歌）

のような作品があるが、それは特に取り上げる必要もないであろう。しかし、岑參の詩で同じ表現や類似した表現がいくつかの作品に繰り返して用いられていることは、注目に値する。以下、類似表現、同一表現について、その例をあげて、その原因を究明してみたい。

一

まず、類似表現、同一表現について、句を單位に見てゆくことにした。その際、類似の程度は、文字の重複と内容の類似との両面から測る必要があると考え、分類を行った。ただし、文字の重複を考えた場合、句の中で重複する文字の占める割合について、五言詩の場合と七

言詩の場合を同列視することに疑念があるため、ともかくも大きく五言と七言とに分けて考えることにした。

さらに、例を分類する時に、次のようなものについては除外して考えた。たとえば、

- 別後能爲政 相思淇水長。(送李文舍人 出華元城)
- 勝事不可接 相思幽興長。(開華十二律御撰 口夜宿報恩等)

のように、字面は同じであっても、その字が用いられている意味に若干のズレが見られて同一表現とは言い難いものや、固有名詞、或いはそれに近いものは除外した。また、「頭欲白」のように、他の詩人達の作品にもまともって用いられた例の多い表現についても、ここでは一應除外して考えるようにした。同一表現、類似表現を全て挙げるのと、ここに用いた例の何倍にもなるはずで、分類が繁雑になるのを避けたためである。なお、分類する時に、例を重複して用いることは避けるようにした。

(A) 五言

一、一句について

それぞれの句を一句ごとに單獨で見た時に類似性が認められる場合である。ここでは、類似の程度を、互いの句に共通している字の數で測ることにした。

① 三字が同じもの……二十九組

他の詩人達の作品と比較してみたときに、熟語として固まってもいないし、用いられやすい言いまわしとも思えない表現でありながら、岑參の作品にだけは、二句以上にわたって同じ用法で用いられている表現で、五字のうち三字まで同じ例を、まず挙げる。

- 1 江村人事少 時作捕魚郎。(送陳元補 歸蘇州拜賦)

岑參の詩について

郡僻人事少 雲山遮眼前。(鄧齊南池 招楊嗣直)

2 誰念在江島 故人滿天朝。(青山峽口泊 舟懷狄侍御)

君子滿天朝 老夫憶滄浪。(上嘉州青衣山中峯頭惠淨上人幽居寄兵部楊郎中)

3 置酒灞亭別 高歌披心胸。(送鄭東 歸河東)

忽來輪臺下 相見披心胸。(北庭貽宗 學士道別)

4 寺出飛鳥外 青峯載朱樓。(登嘉州樓 雲寺作)

送客飛鳥外 樓頭城最高。(陝州月城樓送 辛判官入秦)

5 欲弔二公子 橫汾無輕舟。(臨姬 墓)

伯夷在首陽 欲往無輕舟。(東歸晚次 潼關觀古)

6 孤舟巴山雨 萬里陽臺月。(下外江舟中 續終南舊居)

夢暗巴山雨 家連漢水雲。(送弘文李校書 往漢南拜親)

7 寒天高堂夜 撲地飛雪時。(冬宵家會戲李 郎可兵赴同州)

對酒落日後 還家飛雪時。(送張直公歸 南鄭拜省)

8 昨者新破胡 安西兵馬回。(使交 河郡)

上將新破胡 西郊絕煙埃。(登北庭北樓 呈幕中諸公)

9 物幽與易恆 事勝趣彌濃。(秋夜宿福遊寺南 涼堂呈暹羅道人)

勝槩紛滿目 衡門趣彌濃。(田假歸白 關西草堂)

10 發家見春草 卻去聞秋風。(送王著赴淮 西幕府作)

客舍見春草 忽聞思舊山。(送鄭益遠東 京汜水別業)

11 相思。天。外。南望無窮已。(送青旌招提歸上 人遠遊吳楚別詩)

鄉路。天。外。歸期如夢中。(安西館中 思長安)

12 東南隨去馬。人吏待行舟。(送揚州 王司馬)

神仙吏姓梅。人吏待君來。(歸江陵東少府赴 任便呈梅荆州)

13 路。盤。石。門。窄。匹馬行才通。(秋夜宿揚州寺南 涼堂呈贈道人 關鐵門)

橋跨千仞危。路盤兩崖窄。

14 孤城帶後湖。心與湖水清。(送許子擢第歸江寧 拜親因寄王大自歸 拜親因寄王大自歸)

此地隣東溟。孤城帶滄州。(平原 送原)

15 檉馬嘶柳陰。美人映花枝。(過梁州尋趙處 尚書大夫公)

駟馬映花枝。人人夾路窺。(朝麥聊喜趙處 河南中丞使別)

16 白鳥上衣桁。青苔生筆牀。(初至西院官舍南池呈 左右省及兩宮諸故人)

山蟬上衣桁。野鼠緣藥盤。(左僕射相國梁公東齋 幽居同發拾遺所獻)

17 別來逾十秋。兵馬日紛紛。(過礪山王處士 黑石谷隱居)

我皇在行軍。兵馬日浩浩。(行軍二 首其一)

18 渡口欲黃昏。歸人爭渡喧。(夜雨舟中 巴南事)

花間催秉燭。川上欲黃昏。(早春陪崔中丞 泛澗花溪宴)

19 北風吹煙物。載勝鳴中園。(奉州雨後 貽趙知音)

縣樓壓春岸。載勝鳴花枝。(敬州杜華洪上 月題崔長韻)

東歸不稱意。客舍載勝鳴。(送魏四 箱道歸)

20 一從襄陽住。幾度梨花飛。(送原)

眼前春色老。羞見梨花飛。(送綰州李司馬秩 藩歸京呈李兵部)

邊城細草出。客館梨花飛。(河西春暮 憶秦中)

梁園二月梨花飛。卻似梁王雪下時。(梁園歌送王 南王說判官)

21 自憐蓬鬢改。羞見梨花開。(春與恩南山舊 盧招判建正字)

徒教柳葉長。謾使梨花開。(誠州南池候 殿中丞不至)

忽如一夜春風來。千樹萬樹梨花開。(白雪歌送武 判官歸京)

22 心知別君後。開口笑應稀。(臨別客舍 留別那四)

逢君開口笑。何處有他鄉。(尋楊郎中 宅即事)

長安城中足年少。獨共韓侯開口笑。(喜韓侯 相過)

23 旗旌遍草木。兵馬如雲屯。(潼關鎮國軍句覆使 院早春寄王同州)

焚香如雲屯。幡蓋珊瑚垂。(登千福寺楚金潭 節法華院多寶塔)

24 回風醒別酒。細雨濕行裝。(誠州登天平 丞入京市馬)

池涼醒別酒。山翠拂行纜。(崔駟馬山池重 送宇文明府)

雨氣醒別酒。城陰低暮曛。(送薛播遷 第歸河東)

25 急管雜青絲。王瓶屈金卮。(多曾家會饌李 郎可兵赴同州)

置酒宴高館。嬌歌雜青絲。(過梁州奉贈張 尚書大夫公)

細管雜青絲。千杯倒接離。(陪封大夫宴 瀚海亭納涼)

嬌歌急管雜青絲。銀燭金杯映翠眉。(使君席夜送嚴
河南赴長水)

26 逆旅悲寒蟬。客夢驚飛鴻。(送王著赴淮
西幕府作)

出關策匹馬。逆旅聞秋蟬。(送顏少府
投鄭陳州)

27 浮名何足道。海上堪乘桴。(酬成少尹
谷見行呈)

微官何足道。愛客且相攜。(早秋與諸子
觀西亭觀子
眺)

28 無處豁心胸。憂來醉能銷。(青山峽口泊
舟懷狄侍御)

儒生有長策。無處豁懷抱。(行軍二
首其一)

29 衫冷曉猿悲。楚客心欲絕。(下外江舟中
懷移南舊居)

楚客腸欲斷。湘妃淚斑斑。(秋夕題羅山人
湘三峽流泉)

以上列舉した二十九例のうち、數例について若干の補足説明を以下に加える。

24 回風醒別酒。細雨濕行裝。(贛州送天平何
丞入京市馬)

池涼醒別酒。山翠拂行鑣。(崔驛馬山池
送宇文明府)

雨氣醒別酒。城陰低暮曛。(送薛播羅
弟歸河東)

山雨醒別酒。關雲迎渡船。(同劉郎將
贈河東)

右の例、「醒酒」という熟語ならば他の詩人の作品にも使用例は多い。だが「醒別酒」と三字のまとまりとして、しかも四回も詩に用いている詩人は他にはいない。また、後の二例については「雨」字も共通しており、五字のうち四字が共通していることにもなる。しかし一應四例を一組としてこの分類に入れておく。

25 急管雜青絲。玉瓶屈金卮。(多寶家會觀字
郎可兵赴開州)

置酒宴高館。嬌歌雜青絲。(過樂州李贈
尚書大夫公)

細管雜青絲。千杯倒接離。(贈對大夫
觀海亭納涼)

嬌歌急管雜青絲。銀燭金杯映翠眉。(使君席夜送
嚴河南赴長水)

四例とも「青糸に雜じる」という。「青糸」は、對應する語が「接離」や「翠眉」であるところから、黒髪を指す。李白に、

君不見

高堂明鏡悲白髮。朝如青絲暮成雪。(贈進
士)

という例もある。岑參の句ではそれぞれ、急管、細管の音色、嬌歌の聲が「青糸」黒髪の人々の間に流れ、入り込むことを言っているのである。この四例をこうして並べてみると、單に「雜青糸」の三字が同じというだけではないことがよくわかる。急管と細管はいずれも笛の音色であるし、急管と嬌歌を組み合わせると、最後の七言句の「嬌歌急管雜青糸」になる。しかもそれぞれの對句の描き出す情景にはほとんど差がない。岑參はこの表現、およびこの表現がもし出す情景が氣に入っており、それを目先を變えて何度か使ったと考えることができるだろう。

27 浮名何足道。海上堪乘桴。(酬成少尹
谷見行呈)

微官何足道。愛客且相攜。(早秋與諸子
觀西亭觀子
眺)

五字のうち三字が同じであるのだが、述べている内容にはほとんど差が無い。「浮名」も「微官」も指しているものは同じである。このほか酷似した例として、

一官詎足道。欲去令人愁。(登嘉州
巖寺作)

という句もある。

28 無處豁心胸。憂來醉能銷。(青山峽口泊
舟懷狄侍御)

儒生有長策 無處豁懷抱(行軍二)
「心胸」と「懷抱」は同じ内容である。また前者の「豁心胸」に注目すれば、他に、

不意今棄置 何由豁心胸(東歸後魏爲至泥溪舟中作)
の例がある。

29 杉冷曉猿悲 楚客心欲絕(下外江舟中樓終南舊居)
楚客腸欲斷 湘妃淚斑斑(秋夕臨瀛山人彈三峽流泉)

「腸 斷つ」という表現は、このほかに八例もあり、ありふれた表現でもある。「心 絶ゆ」という表現は、李白に數例あり、六朝の鮑照に逆のぼることができるが、「斷腸」ほど多く用いられる表現ではない。だが、ここにあげた二例は、文字面からも内容面からも良く似ているといえよう。

このほか

欲向嫫姚幕 翩翾去若飛(送裴判官自賊中再歸河陽幕府)
稱意人皆羨 還家馬若飛(送薛參軍歸第東都觀省)
去馬疾如飛 看君戰勝歸(送滑秀才補第歸蜀)

草頭一點疾如飛 卻使蒼鷹翾向後(節度赤驃馬歌)
火山五月人行少 看君馬去疾如鳥(武軍送劉判官赴嶺西行軍)

のような例もある。これらは字面に多少の違いがあるが、同じ發想から作られた、極めて良く似た表現である。こうした例は他にも見られ、本稿で分類した例以外にも数えきれぬほどの類似表現が存在する。

② 四字が同じもの……十七組

一句五言、五字のうち四字まで同じ例である。

1 置酒高館夕 邊城月蒼蒼(武威送劉判官赴安西行營使皇高開府)

置酒宴高館 嬌歌雜青絲(過梁州奉陪張尚書大夫公)

2 不知何代策 空使蜀人弊(送狄員外巡按西山軍)

文公不可見 空使蜀人傳(文公講堂)

3 看君馬首去 滿耳蟬聲愁(送薛阜歸河東)

看君走馬去 直上天山雲(醉裏送裴子赴鎮西)

火山五月人行少 看君馬去疾如鳥(武軍送劉判官赴嶺西行軍)

4 吾廬終南下 堪與王孫遊(賓州客舍酒酣贈王綽寄題南樓)

弊廬終南下 久與眞侶別(下外江舟中樓終南舊居)

5 早知清淨理 久乃機心忘(上嘉州青衣山中峯題惠淨上人幽居寄兵部楊郎中)

萬事信蒼蒼 機心久已忘(尋楊郎中宅即事)

6 君子滿清朝 小人思掛冠(太一石簾崖口潭舊廬招王學士)

君子滿天朝 老夫憶滄波(上嘉州青衣山中峯題惠淨上人幽居寄兵部楊郎中)

7 稀微了自釋 出處乃不同(自潘陵尖題少室居止秋夕題眺)

喧幽趣頗異 出處事不同(劉相公中書江山畫驛)

8 朝從老僧飯 昨日崖口宿(題華嚴寺還公禪房)

因從老僧飯 更上夫人臺(登涼州尹臺寺)

9 萬事奉王事 一身無所求(初過龍山途中呈字文判官)

四海猶未安 一身無所適 (西蜀旅舍春歡寄初
中故人呈狄評事)

10 平生抱忠信 難險殊可忽 (江上阻
風雨)

平生抱忠義 不敢私微軀 (行軍二
首其二)

11 同風醒別酒 細雨濕行裝 (魏州送天平何
丞入京市馬)

春流飲去馬 暮雨濕行裝 (送懷州
吳別駕)

12 翻作瀟陵客 憐君丞相家 (送宇文南金放後歸太原
寓居因呈太原郡王綽)

雖不舊相識 知君丞相家 (送陳子慶
送鄭待御)

13 江亭酒甕香 白面繡衣郎 (趙少尹南亭
送鄭待御)

英椽柳家郎 離亭酒甕香 (送柳錄事
赴梁州)

14 雙魚莫不寄 縣外是黃河 (送王錄事
却歸華陰)

縣中饒白鳥 郭外是黃河 (送崔主簿
赴夏陽)

15 紅亭出鳥外 驄馬繫雲端 (魏州西亭陪
端公宴集)

亭高出鳥外 客到舊雲齊 (早秋與諸子登
魏州西亭觀眺)

16 錦席繡拂廬 玉盤金屈卮 (過梁州李
尚書大夫公)

急管雜青絲 玉瓶屈金卮 (多習家會戲李
郎可兵赴同州)

17 願謝區中緣 永作金人宮 (秋夜宿楊遊寺南
涼堂呈嚴道人)

願割區中緣 永絕塵外遊 (登嘉州後
顯寺作)

庶割區中緣 脫身恒在茲 (登千福寺楚金輝
師法華院多寶塔)

右の例の「願」も「庶」も、ともに「ねがう」意、また「謝」も「割」

岑參の詩について

も、ともに「たつ」意であるから、この三例には、表現面でも内容面でもほとんど違いが無いと言える。下の句には、前二例ではともに「永」字が用いられており、ここにも共通点が見出される。

右にあげたものも例から考えると、五字のうち四字が同じであるという事は、意味の上でもほとんど違いが無いと言える。

③ 五字が同じもの……五組

五字が全く同じものである。

1 故園江樹北 斜日嶺雲西 (關嶺十三侍御登玉
巖山思故園見寄)

半天城北雨 斜日嶺西雲 (送王伯倫應
制授正字歸)

2 離憂不可忘 襟背思樹萱 (滄州魏國軍句覆使
陸早奉寄王同州)

端居春心醉 襟背思樹萱 (春遇雨使
貽趙知音)

3 昨嘆攜手遲 未盡平生懷 (梁州對雨懷趙二秀才便呈
趙大判官時疾贈余新詩)

早知安邊計 未盡平生懷 (登北庭北樓
呈幕中諸公)

4 早知清淨理 久乃機心忘 (上嘉州青衣山中峯題惠淨
上人幽居寄兵部楊郎中)

早知清淨理 常願奉金仙 (登靈
持齋)

5 回瞻北堂上 金印已生塵 (西河太守杜公
挽歌 其二)

惟餘朝服在 金印已生塵 (河南尹絳國公贈工部
尚書徵公挽歌 其一)

これらの描き出す情景、含む意味は、すべて同じである。なお、ここに挙げた例以外にも五字中五字が全く同じ例がある。だがそれらは後述するため、ここでは割愛した。

二、二句について

類似が二句にわたる場合であるが、その場合は、単に重複する文字

の數だけでなく、内容面も考慮して分類した。

① 一句が類似し、残りの句にもその影響が見られるもの……九組

例えば

1 山色低官舍 湖光映吏人 (魏李尉 武康)

虞坂臨官舍 條山映吏人 (送秘書虞校 書虞剛丞)

下の句の「映吏人」が同じだけではなく、上の句の「官舍」も兩者に共通する材料である。いったい、岑參の送別詩では、山、官舍、湖、城などが、極めて頻繁に登場する。同じような素材が繰り返し用いられば、描き出される情景も良く似てくるのは當然の結末であるから、そのことも重複表現の生まれる理由の一つと考えられる。したがって、この例は岑參の送別詩の一つの特徴を示しているといえるようである。以下例を挙げると、

2 州縣信徒勞 雲宵亦可期 (多臂家會魏李 郎可兵赴開州)

州縣不敢說 雲宵誰敢期 (魏州送鄭典宗 弟歸扶風別盧)

3 江城橘花發 滿道香氣氤 (送蜀郡 李揆)

山店橘花發 江城楓葉新 (送周子下 德遊京下)

4 白髮悲明鏡 青春換弊裘 (武威春暮聞宇文判 官西使還已到官昌)

白髮悲花落 青春羨鳥飛 (寄左省 杜拾遺)

5 博陵無近信 猶未換春衣 (送郭 雅言)

三年絕鄉信 六月未春衣 (臨洮客舍 留別邢四)

6 灑水南州遠 巴山北客稀 (巴南舟中思 陸渾別業)

漢水行人少 巴山客舍稀 (送潘秀才 綏德歸蜀)

7 富貴情易疎 相逢心不移 (過梁州奉贈張 尙書大夫公)

富貴情還在 相逢豈問然 (尙書念舊垂賜袍衣率 題德句獻上以申感謝)

8 對酒風與雪 向家河復關 (送鄭莊歸東 京汜水別業)

終日風與雪 連天沙復山 (寄宇文 列官文)

9 到來能幾日 不覺鬢毛斑 (初至魏 爲作)

別君能幾日 看取鬢成絲 (綢綬驛喜逢 河南中丞便別)

② 一句が類似、残りの一句も類似した内容を述べているもの……九組

1 頃來關章句 但欲閑心魂 (嶽山西峯 草堂作)

頃來廢章句 終日披案牘 (那坐 閑坐)

2 謁帝向金殿 隨身唯寶刀 (陝州月城樓送 辛判官入奏)

弱冠已銀印 出身惟寶刀 (送張郎中赴 龍右觀省)

3 園廬幸接近 相與歸蒿萊 (春與思南山書 盧招柳建正字)

園林幸接近 一爲到柴扉 (送四領薛 侍御東歸)

4 忽如江浦上 憶作捕魚郎 (璽金城臨 河驛樓)

江村人事少 時作捕魚郎 (送嚴元振歸 歸蘇州拜觀)

5 憑將兩行淚 爲訪邵平園 (送崔員外入 秦因訪故園)

憑添兩行淚 寄向故園流 (西過荊州見 渭水思秦川)

6 江鳥飛入簾 山雲來到牀 (東陵留題太常欲卿草堂)

江樹連官舍 山雲到臥床 (赴梁州)

7 早聞達士語 偶與心相通 (田假歸白關西草堂)

曩聞道士語 偶見清淨源 (嶽山西峯草堂作)

8 南樓取涼好 便送故人歸 (南樓送)

西亭繫五馬 爲送故人歸 (陪使君早春西亭送王贊府赴還)

9 儒生有長策 閉口不敢言 (漣州國軍句覆使院早春寄王同州)

儒生有長策 無處豁懷抱 (行軍二首其一)

9の例は、上の句の五字とも同じであり、下の句も極めて似た内容になっている。

③ 表現・内容共酷似しているもの……六組

一對の句の表現も内容も似ているもので、②よりもさらに類似の程度が高いと思われるものである。

1 白憐蓬鬢改 羞見梨花開 (春興思南山舊盧招柳建正字)

眼看春色老 羞見梨花飛 (送鄭州李司馬秩送歸京呈李兵部)

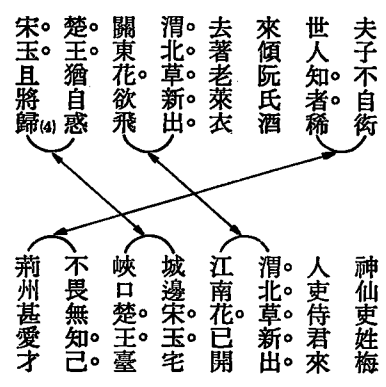
描き出すものが酷似している。ともに役人生活の思うに任せぬことを述べた詩である。その中に、前の詩には「西掖誠可戀 南山思早回」の句があり、後の詩には「久客厭江月 罷官思早歸」の句があつて、この兩者にも類似点が見出だせる。

2 客舍草新出 關門花欲飛 (陪使君早春西亭送王贊府赴還)

渭北草新出 關東花欲飛 (送崔全被放歸都觀省)

渭北草新出 江南花已開 (送江陵景少府赴任使長蘆荊州)

送崔全被放歸都觀省 送江陵景少府赴任使長蘆荊州



のごとく、他にも似た材料が詠い込まれており、互いに類似した詩であるとの印象をまぬがれない。

3 胡塵暗河洛 二陝震鼓鼙 (魏州鄆齊南池幽興閣三侍御道別時任魏州長史)

胡塵暗東洛 亞相方出師 (魏中開陝西魏州官題)

詩題に示されている通り、この兩詩はともに岑參が魏州で作った作品である。岑參が魏州に滞在した時期は、聞一多の「岑嘉州繫年考證」によれば、乾元二年(七五九)四十五歳から寶應元年(七六二)四十八歳までという。安祿山の亂、史思明の亂と續いた世情の混亂は未だ收まらず、事態收拾のための出兵も少なくなかった時期である。ここにあ

げた二詩は、ともにそうした時勢を反映しており、岑參自身は號州長史という「微官」について靜かな生活をしながら、鎮壓軍に参加する人を送るという内容で、作詩の時期も場所もほぼ同じ作品である。しかも後の詩には、ここにあげた二句に續けて、「分陝振鼓鼙 二嶠滿旌旗」とあつて、前の詩の下の句に酷似している。

4 夢魂知憶處 無夜不先歸 (巴南舟中思 歸涇州)

夢魂知憶處 無夜不京華 (江山人)

前の詩は、作者が晩年巴地を流浪した時期の作と思われる。故郷を指して出發したものの、群盜に阻まれて遂に歸り得なかつた作者であつた。また、後の詩は號州での作と思われる。前述のごとく號州長史の任は岑參自身にとっては「微官」である。したがつて都に歸りたい、だが召還の知らせは無い。つまりこの兩詩の作詩状況は異つてゐるが、歸りたいという思いは似通つてゐるといえる。この二例はともに、「夢魂」が作者の「憶處」を知つて先に歸つてくれるという、ほとんど同じ内容である。しかもここに見える捉え方は珍しい。すなわち、夢は自分が見るものであり、「夢魂」を自身と切り離して考えることなどできよう筈はない。にもかかわらず、岑參は自分とは別に「夢魂」というものの存在を考えているのである。李白に、

春風復無情 吹我夢魂散 (大隄曲)

という例があるが、このような「我が夢魂」という捉え方、またその自分と一體の「夢魂」に働きかけるのは、自分とは關係の無い他者であるという點については理解が容易である。だが岑參の例では、「夢魂」が作者の「憶處」を知るといふ。自分とは少し離れて、自分を見つめる「夢魂」といふものがあると考へてゐる。こうした例は他の詩

人の作品には無いようである。つまり岑參は、獨自の表現をほとんど同じ形で、二つの作品に用いてゐるのである。

5 名登郟詵第 身著老萊衣 (送陸參傳權 第東都歸省)

新登郟詵第 更著老萊衣 (送清房才 歸第歸才)

これらに似た表現は、ほかに、

來傾阮氏酒 去著老萊衣 (送崔全被放 歸都觀省)

とも使われている。

6 罷起郎官草 初分刺史符 (送在郎中 出守朗州)

罷起郎官草 初分刺史符 (送盧鄆中 杭州赴任)

この二例は、ともにその詩の冒頭に用いられており、この句を含むそれだけの詩は、その構成まで似ているようであるが、それについては後に觸れる。

以上の例のほかに、つぎのような例もある。

○ 俸錢盡供客 家計亦清貧 (贈涇水 韓太守)

憐君守一尉 家計亦清貧 祿米常不足 俸錢供與人 (題新鄆王 參廳壁)

この場合は、一對の句が類似しているというのではない。だが、前の二句をふくらませたような後の四句であることを付記しておく。次に七言詩について検討してみよう。

(B) 七言

① 四字が同じもの……九組

1 辭君走馬歸長安 思君倏忽令人老 (贈涇水 韓太守)

長安遙在日光邊 憶君不見令人老 (送清房才 歸第歸才)

2 火山五月人行少 看君馬去疾如鳥 (武庫軍送劉判官 赴碛西行軍)

火山突兀赤亭口 火山五月火雲厚 (火山雲 歌送別)

3 忽如一夜春風來 千樹萬樹梨花開 (白雲歌送武 判官歸京)

搖鞭舉袂忽不見 千樹萬樹空蟬鳴 (送魏升卿擢第歸東都 因懷魏校書陞陝西

4 城頭月出星滿天 曲房置酒張錦筵 (嫩娘太守 後庭歌)

鸞鸞月出挂城頭 城頭月出照梁州 (梁州館中與 諸判官夜集)

5 太守到來山出泉 黃沙磧裏人種田 (嫩娘太守 後庭歌)

黃沙磧裏客行迷 四望雲天直下低 (賦過)

6 輪臺客舍春草滿 穎陽歸客腸堪斷 (與獨孤慆道別長 句兼呈嚴八侍御)

山陰老僧解楞伽 穎陽歸客遠相遇 (儒師東與韓樽同詣 景雲碑上人即事)

7 無事垂鞭信馬頭 西南幾欲窮未盡 (與獨孤慆道別長 句兼呈嚴八侍御)

平明端笏陪駕列 薄暮垂鞭信馬歸 (西掖省 即事)

8 琵琶一曲腸堪斷 風蕭蕭兮夜漫漫 (梁州館中與 諸判官夜集)

胡笳一曲斷人腸 座上相見淚如雨 (酒泉太守 上辭後作)

9 一生大笑能幾回 斗酒相逢須醉倒 (梁州館中與 諸判官夜集)

三月灞陵春已老 故人相逢耐醉倒 (喜韓 相過)

このほかにも、七字中四字以上重複する例は数多くあるが、字の用法、内容の類似性において、類似表現として取りあげることには問題があると考えられるため、そのような例は除外した。たとえば、

大梁一旦人代改 秋月春风不相待 (梁園歌送河 南王嗣判官)

岑参の詩について

春去秋來不相待 水中月色長不改 (敬水歌送 寶漸入京)
の如きものがそれである。

② 五字以上同じもの……四組

1 喬生作尉別來久 因君爲問平安否 (送魏升卿擢第歸東都 因懷魏校書陝西)

自憐棄置天西頭 因君爲問相思否 (與獨孤慆道別長 句兼呈嚴八侍御)

2 西望鄉關腸欲斷 對君衫袖淚痕斑 (暮春賦州東亭送李 司馬歸扶風別廬)

玉關西望堪腸斷 沉復明朝是歲除 (玉關寄長 安主簿)

3 知爾園林壓渭濱 夫人堂上泣紅裙 (與獨孤慆道別長 句兼呈嚴八侍御)

手把銅章望海雲 夫人江上泣羅裙 (送李明府赴陝州 便拜朝太夫人)

4 與君兄弟日攜手 世上虛名好是閑 (喜韓 相過)

③ 五言詩中の一句を、そのまま七言詩の中に取り入れたもの……二例

1 白髮今無數 青雲未有期 (佐郡 舊遊)

自料青雲未有期 誰知白髮偏能長 (送魏升卿擢第歸東都 因懷魏校書陝西)

2 高陽諸醉客 唯見古時丘 (送魏 任別駕)

鄴都唯見古時丘 漳水還如舊日流 (臨河客舍呈狄 府兄留題縣南樓)

右の諸例でわかるように、七言の場合には五言と比較すると、類似の例が甚だ少ない。殊に七字が七字全く同じという例は皆無であるし、類似が二句にわたる例も無い。恐らく、七言全部が一致する確率

は五言全部が一致する確率よりもはるかに低いという單純な理由であるが、岑參の詩の四分の三以上を五言詩が占めており、いきおい五言詩の中に類似表現の生まれる可能性が高くなってくるのではなからうか。

またつぎに考えられるのは、岑參の五言詩と七言詩のそれぞれに詠われている内容の違いである。岑參の五言詩は、壓倒的に送別の詩で占められている。それに對して、七言詩にはそれ以外の詩もかなりあり、また送別詩であっても、純粹に送別だけを目的とした詩は少ない。むしろたとえば「胡笳歌、送顏真卿赴河隴」詩とか「火山雲歌、送別」詩とか「梁園歌、送河南王說判官」詩などのように送別の詩でありながらも單に送別ということだけでなく、もっと自分の興味を覺えたものを歌っている。單に儀禮的に作られた送別詩ならばある型にはまった詩も生まれがちであるが、歌いたいテーマがあつて作られた詩ならば、それぞれの詩がそれぞれの個性を持つのも當然であるう。

二

以上、類似表現について、句を單位に見てきたが、今度は類似句を、その句を含む一篇の詩の中で考えてみよう。一篇の詩の中で、他にも例のあるような句がいくつも用いられている、ということがあるためである。例えば「過梁州、奉贈張尚書大夫公」詩をとりあげてみよう。上段がその詩である。

……

頃歲遇雷雲

精神感靈祇 ↓ 精心動靈祇 (尹相公京兆府中)

……

浮客相與來

↓ 衆魔不敢窺 (登千福寺地金障 師法華院多寶塔)

何幸承嘉惠

↓ 何幸承命日 (翻成少尹啓 谷見行忌)

小年即早知

↓ 早歲即相知 (送王七儉 事赴隴州)

富貴情易疎

富貴情還在

相逢心不移

相逢豈問然 (尙書舍書理賜袍次率 題絕句獻上以申感謝)

置酒宴高館

↓ 置酒高館夕 (武成送劉單判官赴安 西行僊使早高開府)

嬌歌雜青絲

↓ 嬌歌急管雜青絲 (使君府夜送嚴 河南赴長水)

錦席繡拂廬

急管雜青絲

玉盤金屈卮

↓ 玉瓶屈金卮 (各寄家會饌李 鄆司兵赴開州)

春景透高戟

江雪簪長麈

纏馬嘶柳陰

↓ 駟馬映花枝 (別桑卿喜邊嚴 河南中去使別)

美人映花枝

……

右の例でわかるように、かなりの重複が見られる。これは句数の多い古詩なるがためではなくて、律詩においても同様である。「陪使君早春西亭送王贊府赴選」詩をみると、

西亭繫五馬

便送故人歸 (南樓送 翻題)

爲送故人歸

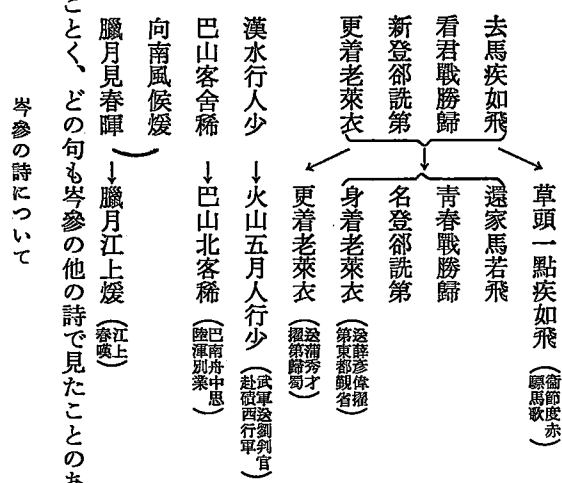
↓ 因送故人行 (送張秘書充劉相公通汴 河判官使赴江外觀察)

客舎草新出
關門花欲飛
渭北草新出
關東花欲飛
渭北草新出
江南花已開
(送江陵張少府赴任復呈衛荆州)

到來逢歲酒
卻去換春衣
猶未換春衣
(雜言)

吏部應相待
如君才調稀

このように四句にわたって類似表現がある。さらに「送蒲秀才擢第歸蜀」詩を見ると、



のごとく、どの句も岑參の他の詩で見たことのあるような句ばかりで

岑參の詩について

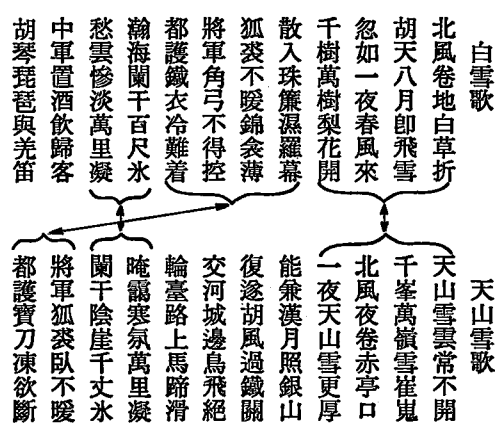
あって、この詩だけの表現と言えるものが見つからない。まるで、他の詩から抜いてきた句をつなぎ合わせて作ったつぎはぎの詩ではないかとさえ思われる。

このように、同じような表現を重複して用いて詩を作り、なかにはそうした句ばかりを並べたような詩もある。そして恐らくそのことに岑參自身は抵抗感を持たなかったのであろう。

三

以上述べてきた岑參の特徴をふまえて、彼の作品に關するいくつかの疑問點について考えてみたい。

まず「白雪歌 送武判官歸京」詩と「天山雪歌 送蕭治歸京」詩との關係である。



紛紛暮雪下轅門
 正是天山雪下時
 風掣紅旗凍不翻
 送君走馬歸京師
 輪臺東門送君去
 雪中何以贈君別
 去時雪滿天山路
 惟有青青松樹枝
 山迴路轉不見君
 雪上空留馬行處

この兩者の關係について、鈴木修次氏は、「唐代詩人論」並びに「唐詩—その傳達の場—」の中で、次のように觸れておられる。

第三の部分……この部分は、さきに掲げた「白雪歌」の描寫とよく似ているが、「白雪歌」よりも少し劣る。あるいは「白雪歌」よりも前に作られたものか。

この考え方は、作品の優劣が作品の成立時期と關わりがあるという觀點から生まれてくるものであろう。だとすれば、比較されることの多い「胡笳歌 送顔真卿赴河隴」詩と「秦箏歌送外甥蕭正歸京」詩との關係についても同様のことが言えるのであろうか。

胡笳歌

秦箏歌

君不聞

胡笳聲最悲

紫髯綠眼胡人吹

五色纏絃十三柱

吹之一曲猶未了

怨調慢聲如欲語

愁殺樓蘭征成兒

一曲未終日移午

涼州八月蕭關道

紅亭水木不知暑

北風吹斷天山草

忽彈黃鍾和白紵

崑崙山南月欲斜

清風颯來雲不去

胡人向月吹胡笳
 聞之酒醒淚如雨
 胡笳怨兮將送君
 汝歸秦兮彈秦聲
 秦山遙望隴山雲
 秦聲悲兮聊送汝
 邊城夜夜多愁夢
 向月胡笳誰喜聞

この二つの作品は、類似した句もあり、一篇の構成も良く似ている。そこで「秦箏歌」が「胡笳歌」より見劣りがするから、「秦箏歌」の方が「胡笳歌」より前に作られた、或いは習作に近いものではなかつたかと。

なるほどこうした考え方は妥當のようにも思える。だが前述の通り、こうした考え方は結局、作品の類似性を作品の成立と深くかわるものと捉えていることから生まれるのであり、類似した作品を比較してその優劣から成立の先後を測っているのである。だが、岑參の場合にこの考え方があてはまるかと言えば疑問である。同じような展開の、同じような表現を用いた作品は、岑參には少なくない。しかもそれは限られたものについてだけ言えることではなく、彼の作品のどの側面から見ても言えることなのである。

中野美代子氏は「岑參の塞外詩」の中で、「秦箏歌」についてつきのような指摘をされている。

この詩をつくった年代は不詳である。したがって、作詩の情況は不明であるが、詩意より推すとおそらくは岑參が塞外に在るとき、すなわち「胡笳歌」よりのもの作であろう。この兩者の類似點についてはいろいろ問題もあるが、いまは、岑參は、ある主題についていくつも類似の詩をつくるという傾向をもっている、ということだけを述べるにとどめたい。

この中の「ある主題について」という部分が若干氣になりはするが、この見解は概ね妥當ではなからうか。岑參の作品の成立については、その作品自體から探るべきであって、類似作品や類似句は判断の材料にはならない。他の例なども合わせて考えるとき、氣に入った表現は何度でも使い、表現の類似性、構成の類似性など意に介していなかったと考えられる。

次に「蜀葵花歌」について見ると、

昨日一花開 今日一花開

今日花正好 昨日花已老

始知人老不如花 可惜落花君莫掃

人生不得恒少年 莫惜牀頭沽酒錢

請君有錢向酒家 君不見蜀葵花

ここにあげたのは「全唐詩」に見える形で、「始知人老不如花 可惜落花君莫掃」の二句について「上二句與韋員外家花樹歌相重。他本多無此二句」という注が加えられている。この注にいう他本の形は、現在、四部叢刊本がそのようになっている。どちらの形が本来のものなのか、多少の推察を加えると、重複を理由に四部叢刊本の形を採るのは、岑參の重複頻用の例から考えて、早計であろう。二句がそっくり他の作品にも用いられている例は、岑參の場合、他にもある。また、この二句が加わったからといって、型式、内容とも不都合はない。したがって句の重複は削る理由にならない。

最後に「酒泉太守席上作」について考えてみたい。

酒泉太守能劍舞

高堂置酒夜擊鼓

胡笳一曲斷人腸

A

岑參の詩について

座上相見淚如雨
琵琶長笛曲相和
羌兒胡雛齊唱歌
渾炙犁牛烹野麋
交河美酒金叵羅
三更醉後軍中寢
無奈秦山歸夢何

B

四部叢刊本には、ここにあげたような十句の形で載せられている。だが「全唐詩」では、そうはなっておらず、AB二つの部分に分けられ、Aの部分が七言絶句に、Bの部分が七言古詩に、等しく「酒泉太守席上作」の題で收められている。同じ題の作品が二か所に分かれているのはおかしいという理由で、四部叢刊本の形が正しいと考えるのは、これまた早計であろう。極端なことを敢て言えば、「全唐詩」のようなAの形もBの形も、また四部叢刊本のようなAとBを一つにした形も、ともに存在したと考えることも可能である。岑參が邊塞に行ったのは一度ではないという。それなら酒泉を通ったことも二度三度とある筈である。したがって酒泉の太守の席上で詩を作る機会が何度かあってもおかしくはないであろう。たとえば假りに、最初Aの形で發表し、二度目にはその發表済みの分も含めたAとBを一つにした形で發表した、という場合も考えられるのではあるまいか。つまり、三種の詩の形のうちの二つ、あるいは三つともが重複して存在した可能性を否定してしまふことはできない。少なくとも、重複を理由に、この三種の詩形のいずれかを否定してしまふことはできないであろう。

同じことが、「全唐詩」に載っている「失題」と稱する四句について

とも言えるであろう。

帝郷北近日 瀘口南連轡

何當遇長房 縮地到京關

この四句は、五言古詩の「阻戎瀘間群盜」詩の中にある。とすれば、岑參がこの四句を五言古詩とは別に發表したことがあったのではなからうか、という推測も成り立つであろう。

以上述べてきたように、岑參の作品の中には、字句の類似した作品があったり、同じ句が他の作品に重複して見られる場合があるが、類似しているからといって、その部分の優劣から作品の成立の先後を決定することはできない。また、いくつか別の形を持つ作品があるが、重複を理由に安易に詩形を決定してしまうこともできないであろう。

四

それにしても、岑參がこれほど類似した表題を繰り返し用いた、そしてそのことに抵抗感を持たなかった如くに思われるのは何故であろうか。

第一に、岑參の詩は、その詩の作られた主旨の下に一貫して流れてはいないということである。古詩は勿論、八句の律詩、僅か四句の絶句でさえ、句と句のつながりが薄い。飛躍し、屈折し、自分の目の向くままに、心の感じるままに並べてあると言っても過言ではない程であり、そこにはほとんど作爲が感じられない。詩が、作者の主旨の下に一貫して流れ、緻密な計算によって練りあげられて、個々の句がその詩の中で明確に位置づけられているようなものであれば、その詩の中でこそ生じる表現、その前後と切り離すことのできない表現が、そこには積み重ねられているに違いあるまい。ところが岑參の詩では、

句と句のつながりが緊密でないために、類似表現や重複表現が用いられていても違和感を感じることがなかったのである。

第二に、展開の類似性ということがある。特に送別詩の場合、用いられている故事の位置、擬人法の位置などが似ているように思われる。とりわけ、儀禮的に作られたのではないかと思われるような作品にその傾向が強い。同時に、用いられている素材も、限られたものが何度も用いられているようである。儀禮的に詩を作る機会が多かった、そのことも類似の原因と言えるだろう。歌いたいテーマがあつて作つたと思われる作品に重複表現が少ないのも、それを裏付けている。

第三に、岑參は氣に入つた表現は何度でも用いたかつたのではないかと思う。最初に岑參の詩の特徴を挙げた際に述べたように、その詩には、對象の捉え方が特異であることや、岑參以前には例の無い語句を用いていることなどの特徴があつた。そうしてその詩は、杜甫の「九日寄岑參」詩に、

岑生多新詩 性亦嗜醇酎

とあるように、讀む者に「新鮮」な感じを與えるものであつた。そうした表現の中には、岑參自身にもう一度使いたいと思わせるようなものもあつたのではないだろうか。また、詩を受けとる側にも、岑參に對してそうした表現を期待する氣持ちもあつたのではないだろうか。

第四に、岑參は見たまま感じたままをそのままの言葉で書いているということが考えられよう。岑參の言葉にはあまり難しいものが無い。用いている字の種類もそう多くはない。杜甫と比較するのは極端かも知れないが、出典のあるような語を用いることに力を盡した跡はない。岑參以前には例の無いような語も少なくないが、それらも難

解なものではない。また、岑参以外には例の無いような獨特の表現もある。だがそのほとんどは、極めて容易に、具體的に目の前に思い浮かべられるほどわかりやすい。わかりやすい言葉、普段着の言葉と言っても良いような言葉で詩を作れば、似たような表現になってくるのも不思議ではない。

岑参がわかりやすい言葉を用いたことについて、岑参の死後三十年、嗣子の佐公に依頼されて「岑嘉州詩集」を編纂したという杜確の序に、つぎのような文章がある。

屬辭尙清、用意尙切。其有所得、多入佳境。迴拔孤秀、出於常清。每一編絕筆、則人人傳寫。雖閩里士庶、戎夷蠻貊、莫不諷誦吟習焉。

岑参は天寶三載(七四四)三十歳の時、次席で進士に及第した程の人であるから、語彙が乏しかった筈はない。それなのに「閩里士庶、戎夷蠻貊」にも理解され、感銘を與えたという。恐らく岑参は意識して、難しい表現を用いないで、わかりやすい詩を作ったのであろう。

注(1) テキストは四部叢刊本「岑嘉州詩七卷」を使用し、「全唐詩」によってこれを補った。

- (2) 五言について見ているのであるから、七言の例は當然除外すべきである。だが敢えてここに並べたのは、同一表現が他にも存在することを示し、参考に資するためである。以下の例についても同様。
- (3) この例の「屈金危」を「全唐詩」では前の例と同じ「金屈危」に作る。

(4) 「宋玉」四部叢刊本は「片玉」に作る。いま「全唐詩」に従う。

(5) 「聞一多全集三」(開明書店)所収。

岑参の詩について

(6) 「刺史」四部叢刊本は「刺史」に作る。いま「全唐詩」に従う。

(7) 鳳出版 一九七三年

(8) NHKブックス 一九七六年

(9) 「天山雪歌送蕭治歸京」詩の

陰鶻寒氣萬里凝 闕干陰崖千丈氷

將軍狐裘臥不暖 都護寶刀凍欲斷

の部分を目指す。

(10) 「日本中國學會報」(第十二集) 一九六〇年